

まつりが育む地域の力

被災地から再興する祭りと 民俗芸能

赤坂 憲雄

Interview by
Norio Akasaka

民俗学者

* 「生きとし生けるもの」への 供養と鎮魂

鹿踊りししかぶは、岩手県から宮城県一帯に伝わる民俗芸能の一つだ。獅子にも似た鹿頭ししかぶを被った踊り手が太鼓を打ち鳴らし、激しく乱舞する。そのさまは勇壮でときに猛々しい。東北を訪れた岡本太郎はこれを見て大いに感銘を受け、その印象をいくつかの文章や写真に残している。

昨年5月末、宮城県の南三陸町を訪ねた時に、東日本大震災の津波で壊滅した水戸部みとべという集落で初老の漁師から興味深い話を聞いた。家をまるごと失ってしまったその方は、被災後しばらくして、大事なものが残っていないか瓦礫のなかを探し歩いたという。そのなかで見つけたのが鹿踊りの太鼓と衣装だった。きれいに洗って仲間たちと一緒に避難所

で踊って見たところ、地元のおばあさんたちが緊張の糸が切れたように涙を流したというのだ。その集落には鹿踊りの供養塔があつて、津波にも流されず残っていた。そこには「生きとし生けるものの供養のために踊りを奉納する」と刻まれていると聞いている。

興味深いことに鹿踊りは、仙台藩、伊達正宗の庶子が宇和島に入封して以来、彼の地にも伝承している。私が7、8年前に伊予地方で見たのは、秋の収穫祭で奉納される「感謝と祝福」の踊りだった。剥製のような鹿頭はどこかやさしげで、踊りは優美で女性的、もつといえは植物的だった。あの男性的で躍動感あふれる踊りがこうも変わってしまうのか、といささか衝撃を受けたものだ。

この違いはどこから来たのだろうか。背景には、厳しい東北の自然風土と深く関わってきた東北人の暮らしがある。先に述べた南三陸町の集落にしても地形的に海と山が近い。

そのなかで漁師たちは鹿猟をして、里山を育てる役割も担わなければならなかった。西日本に比べると、生き物の命を奪わなければ生きていけない。それだけ生活のなかで生き物との交渉が濃密で「生きとし生けるもの」すべてへの供養と鎮魂がリアルな行為であった。西日本ではこうした感覚は希薄なのだろう。それが踊りの違いに際立って現れているのだ。



東日本大震災で壊滅的な被害を受けた
宮城県南三陸町水戸部地区（提供：陸上自衛隊第4師団）

＊失われた「祭りの風景」の再編

このように東北の祭りや民俗芸能には「魂や供養」というテーマが濃密に流れている。ねぶたや竿灯にしても厄災を祓うというテーマがある。宮沢賢治に「原体剣舞連^{はらたいけんばいれん}」という岩手の民俗芸能を見て書かれた詩歌があるが、ここに登場する子供たちの勇壮な剣舞も盆供養として行われたものだ。〈3・11〉で多くの町や村がその土地に住む人とともに流されて、大勢が亡くなった。一時は東北の夏祭りは開催が危ぶまれたが、それでも被災地の瓦礫のなかから祭りや民俗芸能が次々復活していった。それだけ人々は祭りに飢えていたし、犠牲者の鎮魂が求められていたのだろう。あるいはもつと根源的には、生き残った人たちが、祭りや民俗芸能がその土地に住む証し、生きていくことへの励ましであることを、無意識に感じていたのかも知れない。いずれにしても東北の人たちは、この震災を経験して、改めて祭りや民俗芸能の力を再発見したのだと思う。

とはいえ再興は簡単な話ではない。神社は祭りや民俗芸能の伝承母体にもなっているが、今回の津波で流されたり、壊滅した神社や寺院は相当数に上る。土地を守る神様や、祖先とのつながりは地域のコミュニティにとって重要であり、人と人との絆、心の拠り所とし

て大きな役割を果たしてきた。それらが存続の見通しを失っている。建前上、国や自治体などの行政は宗教学者を再建できない。神社を支えてきた人たちが寺の檀家の人たちにしても亡くなったり、他所へ避難したりで支援どころではない。

さらには「祭りの風景」そのものが自然災害で一変してしまった。祭りはその土地の地形や歴史が堆積している風景の中で組み立てられてきたもの。たとえば神輿が渡御してくる順路ひとつとっても、そこには土地の歴史が刻まれている。それらが失われてしまった地域で、祭りをどうやって再興するのか。一から新しく再編するしかないだろう。津波という悲惨な記憶を織り込みながら、それぞれの土地で祭りがどのように新しいシナリオをもつて再興していくのか。厳しい道のであるのは間違いない。

＊東北の祭りや民俗芸能に新たな光を

そもそも東北の祭りや民俗芸能は、古来連綿と続いてきたわけではなかった。これまで何度となく自然災害や飢饉に見舞われ、そのたびに村や集落に住んでいた人々は離散し、残ったわずかな人々と他所からの移住者で新たな村を作る——そのような過程が延々



剣舞は岩手県下に広く分布している民俗芸能。写真は北上市に伝わる「岩崎剣舞」(提供:宮沢賢治研究会・赤田秀子氏)

と繰り返されてきたのである。そのたびに祭りや芸能の伝統も途切れてしまったはずだが、それでも新たな形で再興し、今の時代に引き継がれてきた。だから私は今回もそのように復興するだろうと思っている。これから被災地の町や村が再編・統合されたり、いろんなケースが出てくるだろうし、時間もかかると思うが、それぞれの地域や土地で、新しい祭りや民俗芸能を創造するような動きが起ってくるに違いない。〈3・11〉後の東北各地における祭り復興の動きを目の当たりにしてきて、そのことを確信するようになった。

じつは告白すると〈3・11〉が起きてしばらく



岩手県花巻市で伝承される鹿踊り



愛媛県西予市に伝承する八つ鹿踊り

くは、東北の祭りや芸能文化の多くは、高齢化が進んで担い手がいないので継承は難しい、いずれ自然消滅せざるを得ないだろう、と思いついでいた。限界集落のような問題を避けがたいこととして傍観していた。だが、実際に被災地を少しずつ歩いてきて、そんな考えを改めるに至った。被災した人々が立ち上がって祭りや民俗芸能を復活させ、再起へと向かう姿を目の当たりにしてきたからだ。これまで厳しい気候風土の中をしたたかに生き抜いてきた人々である。コミュニティの再生という観点からも、東北人にとっての祭りや民俗芸能に新たな光が当てられるべきだと思っている。

＊被災地を歩くことから始める 東北学「第2章」

約20年にわたって私は「東北学」を語り続け、東北各地を聞き書きや取材でめぐってきた。にもかかわらず「3・11」以降、見えていなかった多くのことに気づかされた。これからの地域で何が壊れて消えていくのか。あるいはこの厳しい状況のなかで何が立ち上がってくるのか。その基底に横たわるものをきちんとはと見つめ直さなければいけない、と強く感じている。

それもこれも、私自身これまで東北を分か

ったような気でいたからだ。『おしん』のように、寒くて暗くて貧しい東北は過去のもの、東北は十分に豊かになった、と思いついでいた。実際この20年で東北は著しく発展し、表面上はそう見えた。しかしそれが震災と原発事故を経て、脆くて歪んだ部分が露わになった。貧しい東北がそこかしこに残っていた。私にとってはまるで背後から七首あいくちでも突きつけられた思いがした。

産業界の人たちと話をした時に、東北の賃金は安い、それゆえ賃金を抑えて労働力も確保できる、だから東北に工場が建つのだと聞かされた。私が去年、東北のある村を訪ねた時、農家の庭に機械の部品を作るプレハブの小さな工場があった。大企業の孫請けか末端の製造現場だ。そこで近所の女性たちが時給300円で働いていた。きわめてアジア的な風景だと思った。国内の製造業は低賃金を求めて次々とアジアに出ていったが、東北にこういう形で残されている。被災して家を流されたり、家族を失っているかもしれない彼女たちにとって時給300円でも大切な仕事場なのだ。

私はうかつにもこうした現場を見過ごしていた。正直言ってこれまでプレハブの工場や、原発にしても、民俗学者としての自分の興味の対象外であった。しかし「東北学」は民俗学ではなく地域学である。地域学とは地域の総合的な自己認識のための学問だ。地域のあ

らゆる側面に眼をこらす必要がある。そこで私の東北学の「第2章」としては、何より被災地を歩くことから始め、そこに埋もれているものを丹念に掘り起こしていこうと決めたのだ。

＊ へ3・11 以後の地域学の可能性

今回の震災に際して、私が残念に思ったのは、日本の民俗学は被災地の一部の学者を除いて何も発言していないことだ。これには失望し、民俗学は終わったとさえ思った。しかし地域学は違う。なすべき仕事は今こそあると思っている。なぜなら地域学はその土地に人々が暮らしている限り必要とされるからだ。鶴見和子さんの言葉を借りれば、その地域に住む人たちが、自分たちがそこで生きていくためのシナリオを「内発的に求めている」。しかも地域で生まれ育った「根生い」の人たちだけでなく「余所者」を巻き込んだ新しいコミュニティが各地で立ち上がり、再編の動きが起こっている。たとえば宮城県東松島市の野蒜地区には、明治十年代に国家事業として

開発が進められたが、結局挫折した「野蒜築港」の跡がある。その忘れられた土地の記憶を一生懸命掘り起こして、地域活動を進めている市民グループがいる。それは「お国自慢」などではなく、失敗を含めた、自分たちが住む土地の歴史を知りたいという欲求から、自然発生的に起こってきた活動だ。

これからは東北から新しい世界観を発信していかなければならない。そのためには先ほども述べたように、東北の風土の中で培われた暮らしぶりを掘り起こすことが必要になるだろうし、東北人自らが震災の記憶を留めていくことも大きなテーマになってくる。そうした一つ一つの記憶の集積が犠牲者への鎮魂にもなり、これから東北が進むべき方向を考えるよすがにもなるだろう。

さらに東北は、原発事故という困難に今後もし立ち向かわなくてはならない。私は縁あって、計画的避難区域に指定され、全村避難している福島県飯舘村の人々と話をしてきた。村長は困難な状況のなか覚悟を決めて、踏みとどまって、すべてを引き受けようとしている。その姿勢に共感するとともに、もしかすると非常に厳しい条件のなかから、新しい地

域に生きるライフスタイルが生まれてくるかも知れないと密かに感じている。全てを失ってしまった村が、その核となる心は失わずに、どう立ち上がっていくのか。

それは瓦礫の中から自然発生的に復活した、東北各地の祭りや民俗芸能にも通じるものだ。もちろん全てが復活、再生するわけではないが私自身、そうした祭りや民俗芸能を応援するとともに、被災地から東北学の再編に取り組んでいくつもりだ。

（本稿は、赤坂氏へのインタビューに基づいて、編集室にて構成したものです）

赤坂憲雄（あかさかのりお）



1953年東京都生まれ。福島県立博物館長、学習院大学教授。民俗学をベースに東北の文化や歴史を掘り起こす「東北学」を提唱し、山形市の東北芸術工科大学大学院長、同大東北文化研究センター所長などを歴任。2011年には政府の東日本大震災復興構想会議委員、福島県や同県南相馬市の復興ビジョン会議の委員を務める。著書に『岡本太郎の見た日本』（芸術選奨文部科学大臣賞、ドゥマゴ文学賞）、『増補版 遠野／物語考』など。